



# 偶然の 賜物



川崎ゆきお

「過激なものばかり見ていると、穏やかなものに目がいきますねえ」

「そうなんですか」

「まあ、個人差もあるだろうが、わしはそうだ」

「僕もありますよ。とんがったことばかりしていると、緩いものに目がいきます」

「反動と言えばそれまでなんだが、これは振り子のようなものかもしれないねえ」

「大きく振れば、大きく戻るわけですね」

「その真ん中がある」

「はい」

「しかし、真ん中には振り子時計は動かない」

「ああ、なるほど」

「ブランコで、じっと座っているようなものだ。あれは揺れるから楽しい」

「強く振ると危ないですよ。反転しそうになったり、投げ出されると着地が大変です。背中から落ちたりとか」

「だから、快い振り幅、揺れ幅があるんだろうねえ」

「それは分かるのですが、のんびりしているときほど、大きな動きに出たいです。当然その反対もありますし」

「程良い振り幅なら、そのままでいいのかもしれない」

「でも揺れていることは揺れているのでしょ」

「止まらない程度にね」

「そちらのほうが難しかったりしますよ。バイクも自転車も非常に遅いスピードの時の方がバランスを取るのが大変です。ある程度スピードに乗った方が安定していますから」

「そうだね。だから、振り幅が安定しているより、多少乱れている方が好ましい」

「はい」

「なぜなら、色々な都合で、急に揺れることがある。強い振りが加わることがある。だから、たまにはその強い振りを何度か日頃からやっている方がいい。いきなりだときついだろう」

「強くもなく弱くもなく、また、強くもあり、弱くもある状態ですか」

「ああ、それは普通だろうねえ。特に心がけなくても、そんな状態ではないのかね」

「そうですか」

「しかし、年を取ると、振り幅が減るねえ」

「それは安定していることになりませんか」

「ああ、まあ、そうなんだが、ドタバタしないだけのことかな。やっても同じようなものだと、それほど動かない」

「それでチャンスを失うこともあるでしょうねえ」

「チャンスというか、どさくさ状態で、意外な偶然に遭遇し、思わぬものを得られることがある」

「僕はそちらのほうがいいです」

「善い偶然、巡り合わせ、これは大事だ。殆どそれで決まると言ってもいい」

「犬も歩けば棒にあたるですね」

「偶然には必然性はない」

「そうなですか」

「だったら、偶然などないじゃないか」

「そうですが、やはりそれなりの準備や心がけで、善い偶然を呼び込むのじゃないのですか」

「そうではない。それは必然で、偶然ではないからな」

「では、偶然とは」

「運だな」

「じゃ、何もしなくてもいいのですね」

「善い運もあれば、悪い運もある。だから、結局は決定打はない」

「何かをしても、何もしなくても、運や偶然は、それらに関係なく訪れると」

「それが決定打だ。それまでの小賢しいことなど、関係なくな」

「師匠が今ここにいるのも偶然の賜物なのですか」

「そうじゃ、わしより偉い人間は一杯いたよ」

「一杯」

「ああ、沢山だ。ライバルが多ければ、この座には就けなかった。偶然人材がが底を突いていた時期があつてなあ。そのとき、わしがいた。それだけのことでな。徳が高かったわけじゃない」

「あ、はい」

「それを考えると、運だなあと思うのじゃよ」

「はい、何かやる気が失せる話ですが、それが現実なのですね」

「それでわしは今も思う」

「何でしょう」

「結局、よう分からんとな」

「あ、はい」

了